



第 170 号

二〇二三年七月二日発行  
発行者 奈良県立  
橿原考古学研究所  
奈良県橿原市畝傍町一番地  
編集者 木村理恵

# 「アジアをつなぐ美と精神」展の顛末（下）

坂 靖

## 九. 強制隔離

そこからは、悲惨な目に遭った。

まず届いたのが頭からかぶるつなぎの白い防護服、靴用のカバー、ゴーグル、ガスマスクに相当するような厚いマスクなどの完全防護の品々である。一時間後に退出という指示があり、それらを身につけて待つが、待てどもなかなか来ない。そのあいだに、どうせ戻ってくるのだからと、荷物をホテルに一部置くことを提案した。一旦受けいれてもらったものの、そののちに消毒が必要なため全部荷物を持ち出せという。

そもそも長期滞在を予定しているので、荷造りが大変である。ホテルに置く分と持ち出す分を小分けする作業を慌てておこなったが、それが全く無駄になった。さらに防護服を纏うと、部屋の暖房と相まって暑く

て汗が吹き出し、本当に倒れそうになった。

羅さんに取り次ぎを頼んでその窮状を訴えてからほどなく、ドアの外から白い防護服を身に纏った係員がようやくやってきた。そこで、防護服の着用方法をあれこれ言われたあげく、エレベーターに乗せられた。

荷物を一人では抱えきれなかったのでスーツケースは押しにくれたが、ホテルの一般客と接触しないよう動線に注意をはらい、近づいてくる人を阻止しながらホテルの裏口に向かう。そして、裏口の目貼りしてある

ドアの粘着テープをわざわざはがし、裏口から車の止めてある場所まで行くのに小一時間かかった。目貼りしているテープがなかなかはがれなかったためである。遠巻きでそれを見ているホテル従

次	「アジアをつなぐ美と精神」展の顛末（下）	坂 靖 1
目	坂 靖君のこと	卜 部 行 弘 5
	ソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘とイタリア見学行（下）	北 山 峰 生 7

業員が記録のためか、車に連れられていく私の写真を撮っている。何か事務手続きがあるのか、車のそばにいる係員と遠巻きにいるホテル従業員がコミュニケーションをとろうとするが、なかなか意志疎通ができない。これにも小一時間を要した。言葉も全く通じないなか、どこに連れて行かれるのか、どのような扱いをされるのか、不安にさいなまれた。

このまま一人で連れて行かれるかと思ったが、車に乗り込むと一五分ほどで町中のマンションが並ぶ敷地を行ったり来たりした。結局、携帯電話で連絡をして、一旦その敷地の外の公道上に車が止められた。そこで、一人の若い女性が乗り込んできた。彼女の場合は、マスクだけを着用しており、防護服は着せられていなかった。

一時間ほど車で走ると、北京市海淀区鳳凰鈴の医学視察中心という郊外の強制隔離施設にようやくたどり着いた。車からおろされ、荷物をお

ろしたのち、我々を連れてきた係員は足早にその場を去った。そして、受付とおぼしき場所に三つの荷物をかかえ向かったが、先の女性が手続きを進めていた。そこでも、パスポートを見せてもなかなか手続きは進まずやきもきしたが、部屋の番号の書いた紙を渡された。場所がわからないと思っていると、手招きして「こっち」だという。重い荷物を抱えているが、先へ先へと進み、係員は二階に上がって行った。やむなく、荷物

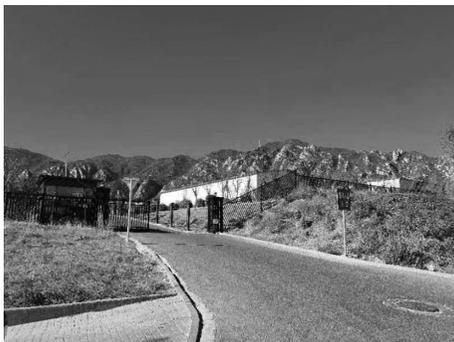


写真 8 北京市郊外の強制隔離施設（入口付近）



写真9 隔離施設別棟をのぞむ



写真10 隔離施設室内の状況 (1)

を下において係員が部屋の場所はここだと指を指す場所に行き、そこまですり荷物を泣きそうになりながら引きずりあげた。

強制隔離施設は、建築現場にあるコンテナハウスを内装して二階に積



写真11 隔離施設室内の状況 (2)

み上げたものだった。歩いたり風が吹いたりするとがたがたと揺れ、雨が降るとその音が響くというしろもので、磨りガラスで囲まれたトイレ・シャワーが部屋の片隅にあり、横になると背中や腰に相当のダメージを受ける非常に固いベッドと、格子のはめられた窓際には机がひとつ、他にはタンスと引き出しのついた家具が配置されていた。ドアをあけるとけたたましくベルが鳴り、窓にはロールスクリーンが一枚あるだけで、夜には投光器がたかれ二四時間部屋のなかが暗くなることはなかった。

唯一の救いは、風が吹くことはあったが雨の日がなく、格子のついた窓をあけると透き通るような青い空のもと、岩肌がみえる山塊の他はあたり一帯には何も美しい自然の景観が広がっていたことである。また、WiFi環境、エアコン、壁暖房が

あったことで外部との連絡や寒さをしのぐことはできなかったものの、女性や老人、子供にとっては耐え難い環境である。

安眠することができずに、固いベッドで背中や腰が痛くなつて鎮痛剤を飲んだ。

こうしたなかでも、数多くの修正点を抱えていた図録の再校をおこなうことや、一月一二日のオンライン講座の中国語翻訳が届いたのでそれを打ち込む作業をおこなった。このようななかでは、YouTubeでも見て、気を紛らわすほからはなかった。

強制隔離の日数は、一〇月二十九日から、ホテルが受け入れてくれれば七日間、そのうちホテルでの三日間の隔離となる。しかしながら、ホテルが受け入れてくれるはずがなく、結局この施設から解放されたのは、一月七日であった。それは、渡航時の集中隔離より運用が厳しく、一〇月二十九日および一月七日の解放日は、隔離期間として換算しないというものであった

そして、PCR検査は毎日のように受け、七日目と一〇日目に抗原検査と室内の環境検査がおこなわれた。

室内の検査は、係員が室内に入ることができないので自分で採取しろという。これは翻訳アプリでようやく聞き取ったものである。これもまた、渡航時の方法とちがうものであった。おまけに、七日目の検査は夜中の二時に起こされたのである。

隔離解除通知書を受け取ったのが七日の一時四〇分頃であった。しかし、健康コードのポップアップは、解除されないままで、やはり羅氏に衛生当局に連絡してもらい、ようやく解除された。

隔離施設の出口までは遠い道のりである。自力で行くほかはないと心に決めて、重いスーツケースを抱えて歩きはじめると、さつきまで弁当を運んでいた白い防護服の係員より声をかけられるが、全くわからない。すると、前を同じように女性がスーツケースを抱えて、とほとほと歩いていく。私もそのあとを追って坂道を下ったが、それを見かねたのか、坂道の途中で白い防護服を着た係員が、私と女性の二人が抱えていた重い荷物を車に乗せて出口まで送ってくれた。

施設出口で隔離解除通知書を見せ、ようやく解放である。公道に車を止めて、早い時間から待つてくれてい

た羅さんのもとによりやくたどりついた。遅い昼食をとったあと、ホテルに到着したのが午後三時二〇分頃で、ここでようやく一息ついた。

### 一〇・業務の引き継ぎ

しかし、その翌日に清華大学へ向かうと、大学への入構ができない。健康コードをよくみると、PCR陰性結果から四日経っているという表示である。強制隔離施設で受けた結果が反映されていないのだ。また羅さんに当局に連絡してもらい、それが反映され外出ができるようになったのは、その日の夕刻であった。

そして翌九日にはオンライン講座の通訳してくれる北京大学の鄔佳宇氏とはじめて顔合わせをし、談さ



写真12 展示室での顔合わせ  
(左から 筆者・平井氏・陳氏・羅氏・王氏)

んと三人で博物館のカフェにて打ち合わせをおこなった。談氏には強制隔離を労ってもらった。

そして、一月一〇日には、一月三〇日に中国に渡航し、隔離施設に入っていた学芸課の平井史史氏の隔離が解除されるということで、博物館の入口でその到着を待った。平井氏は、私の後を受けた随展業務と撤収、日本までの輸送という任を担っていた。さらに、そののちの、成田空港から檀原考古学研究所附属博物館までの陸送の随行、加えて博物館での点検、再展示、収蔵までの業務を担った。

平井氏は黄山美術社の広渡氏とともに渡航していた。さらに、中国国内での展覧会を予定する一方で、清



写真13 博物館ロビーでの会食風景

華大学においてはすでに二〇一八年に「西方絵画五〇〇年」展で資料を貸し出していた東京富士美術館の平野賢一氏、杉浦智氏と、それに同行していた黄山美術社の彭氏も、同じ日程で渡航していた。

しかし、この計五名が博物館の外側で足止めされた。どうも前述の「通行行程カ」がうまく作動しないためらしい。三〇分ほど待たされ、結局入館できたのは閉館間際の一六時三〇分頃であった。

博物館側が一階から四階までのすべての展覧会を案内したのち、一八

带方郡、乐浪郡在晋时期332年被高句丽毁，中国自此失去了位于朝鲜半岛的东部外交据点。上文提到的砖块上没有记载魏国或晋国的具体年号，因此有人认为这是伪造的，所以我们无法断定这座古坟究竟是否是张致的墓。无论如何，我想在此说明的是：张致在3世纪中叶的倭国统治中发挥了非常重要的作用。

写真14 オンライン講座風景

時に歓迎のための会席が博物館一階ロビーでおこなわれた。その頃から北京市内ではわかにか感染者が増えはじめ、行動制限が強化されたが故の会場であるとのことであった。

業務の引き継ぎを一日午前におこない、王氏から平井氏に大学入構許可の手続きや食堂の案内をしてもらったあと、招かれていた公使との会席にむかった。平井氏と公使と書記官のほか、前述した留学生の厚谷氏、日本航空北京支店長の西田昌司氏、黄山美術社の広渡氏・羅氏と昼食をともにして、公使からは日中国

交正常化五〇周年事業についての苦勞談の他、北京ダックの食べ方などを伺った。

夕方には黄山美術社のある北京市中心部の王府井に向かい、会社のあるホテルの一室で黄山美術社主催の会席が設けられた。しかし、感染者の増加のなかで、予定されていた中国文物国家交流中心の大半と杜副館長が欠席せざるを得なかったのは、大変残念なことであった。

### 一一・オンライン講座

一月一二日は、オンライン

ン講座の当日で、博物館の展覧（学芸）部のあるフロアの会議室に私と通訳、司会の談氏は同じフロアにある自分の部屋に分かれて、一三時から開始した。質問などの時間が長引き、予定の時間を大幅に超える長丁場のものとなった。

講座の内容は、図録に書いた「倭国からみた中国」のうち、三〇四世紀について記述したものをまとめ直したものである。日本語の読み原稿を中国語に翻訳してもらい、パワーポイントのデータを作った。専門用語からみて、逐次通訳は難しいと判断したためである。

オンライン講座の聴取者は、二二万七千七〇六名であり、その関心の高さが窺われる。展覧会会期中は、ほぼ毎週土曜日に講座が開かれており、毎回二二万〜二二万の聴取があったと記録されている。それだけで、中国国民の知に対する欲求と、関心の高さは明らかである。オンラインで質問や意見を受け付けており、三〇四世紀の日中交流について、是非、中国で出版してほしいという内容のものも含まれていた。

実はこの日、平井氏や黄山美術社もサポートのため博物館に駆けつける予定であったが、平井氏や広渡氏

の健康コードにポップアップなどが出て外出制限がかかり、それが叶わなかった。私の場合、北京大病院に行つてすぐに解消されたのだが、平井氏の場合は、その後、毎日北京大学へ行き、結局それが解消されたのが私の帰国後の一五日であった。

そして、その後も北京市内での感染が広がり、ついには清華大学への入構もできなくなつてしまう。平井氏は、そのさなかで、撤収作業をおこなうことになった。しかし、今度にはゼロコロナ政策が一転し、最終的にはPCR検査も不要となり、感染が爆発したのは報道のとおりである。

## 二二．帰国とその後

帰国は一月一四日で、未だ外出制限が解除されていない広渡氏とともに空港に向かった。手続きをすれば、こうした状態でも飛行機に乗ることは可能であったが、空港内の飲食店や店舗には入店を拒否するところがあった。海野氏の帰国ときは店舗は全く開いていなかったと聞くが、このときには一部の店が開いていた。

検査のため飛行機の出発は遅れたが、一時間ほどにとどまった。搭乗口までの列車は運行されておらず、

バスでの移動であった。飛行機は空席が目立っており、行きとは異なつて比較的ゆつくりと過ごすことができた。

成田で一泊したのち、自宅に到着したのが一五日の昼過ぎである。夜には談氏からもらつた酒を飲み、お礼のメールを送つた。

帰国直後に安心したせいか、風邪をひいてしまった。おそらく成田のホテルで雇つたのだろう。慌てて検査キットを買い求め検査したが、陰性であった。その後も長引いたので、かかりつけの医院に向かうと、自己流検査は信用できないといわれ、また検査を受けた。ここでも陰性であった。

帰国後は、平井氏の到着を待った。そして、開棚、点検、再展示、収蔵などの作業を完了したのが、この年の御用納めにあたる二月二八日のことであった。

## 二三．コロナ禍のなかで

ともかく、今回の展覧会は、コロナ禍に翻弄されつづけた。そうしたなかでも、関係者の努力によって、展覧会は大きな成功をおさめたといえる。行動制限のなか、観覧者は、一万六千名に達した。コロナ禍によつ



写真15 北京大興空港にて  
(左から 陳氏・筆者・広渡氏)

て精神が抑圧されるなか、却つて文化や歴史、あるいは芸術に対する知性を呼び起こしたのは当然のことであつたのかもしれない。

しかし、今も我々はコロナにおびえ、それに翻弄されつづける毎日を送っている。この未曾有ともいえるコロナ禍に対して、日中両国の政府による政策への歴史的評価は将来になされることであろう。そのなかで、コロナ禍は長い日中交流史において、きつと大きな影響を与えたものとして意義づけられることであろう。

## 参考文献

清華大学美術博物館・奈良県立橿原考古学研究所編『跨越両國的審美…日本与中国漢唐時期文化交流』

## 坂靖君のこと

令和五年二月九日、研究所の岡林さんから電話があり、坂靖君の急逝を知った。

「なんじゃそりゃ。」電話を受けた時の第一声であったと思う。まさに青天の霹靂であった。五年前の藤田和尊さんのこともあり、新しい年代の間では、「お互いに気を付けて」が別れの挨拶となっていた。今となってはそれもむなしく響く。

坂君と私は、大学は異なるが同じ年生まれの同年生であった。一回生からともに研究所の調査補助員として過ごした。研究所への嘱託採用は私が二年早かったが、正職員採用はともに平成元年四月で、令和四年三月とともに定年退職した。

坂君との邂逅は昭和五五年八月の飛鳥京跡第七五次調査であった。中国留学を間近に控えた河上邦彦さんが現場主任で、その下で今尾文昭さんが走り回っていた。同じ補助員には佐々木好直さんや長谷洋一君がいた。意外に思われるかもしれないが、坂君は元々、都城研究を志しており、目的意識を持ったうえで参

## 卜部行弘

加であった。現場なら何でもよかつた私とは雲泥の差であった。この年の飛鳥京跡の調査は第七八次調査（内郭南門）まで続くが、真冬の寒風が吹きすさぶ中、凍えながら南門周囲のバラス敷きを実測したことが思い出される。

この昭和五五年は末永雅雄先生の所長ご退任、附属博物館の新館オープンなど、研究所が大きく変わった年である。学芸や総務課はオープンに備えて既に新館へ移転していたが、調査課は当時の研究所棟（旧研、現在の研究所敷地南端に位置してい



写真1 昭和63年 第192回研究集会にて

た）で業務を続けており、我々は研究所が完全に新館へ移転する以前を知る最後の世代である。ただ、こんなことは坂君と話をしたこともなく、過去のことをネタに盛り上がることもなかった。彼にとってはいつでもよいことであったのかもしれない。

学生時代は坂君と現場を共にすることが多かった。当時の補助員は、調査担当者について現場を回っていたためである。市尾今田古墳群、掖上罐子塚古墳測量、飛鳥京跡第七七次調査、平田金池・大芝遺跡、黒塚東遺跡などであるが、今尾さんのご配慮により、坂君は黒塚東遺跡、私は平田金池・大芝遺跡の概報でそれぞれ遺物の項を学生ながら執筆させ



写真2 平成6年 天理市中山大塚古墳にて  
(左から金斗喆氏、坂靖氏、伊達宗泰氏、寺澤薫氏)

ていたのだ。

市尾今田古墳群は彼が埴輪研究に転じる契機となった調査である。その遺物整理は旧研二階の突き当りの旧所长室で行っていた。夏は室温が四〇℃以上となる中で埴輪の実測に明け暮れる毎日であった。彼のことだから整理を終えた段階で当然、報告書用に埴輪についての報文や考察は少なくとも頭の中で描いていたことと思うが、遂に陽の目を見なかったのは残念でならない。

振り返ってみると、学生時代が彼と最も身近に接していた時であった。研究所に就職以降は、同じ調査課にいてもお互いの業務に専念していたこともあり、深く話し込んだり、酒を酌み交わしたりすることは余り



写真3 平成15年 八条4次(水晶塚古墳)にて

なかった。時節は下るが、平成二六年に天理市観光協会主催のフォーラム「初期ヤマト王権の大和古墳群を巡る」において、彼と私が同じ演壇に立ったことがあった。その場ではアプローチは異なるものの二人とも研究所の人間としては珍しい「邪馬台国非畿内説」を開陳し、「なんや、同じやったんか」と後で笑いあったこともあった。

私の記憶に間違いがなければ、彼の最初の考古学関係の著作は『北小松古墳群調査報告』だと思ふ。昭和五七年一〇月の刊行なので彼の学生時代の仕事であり、同学諸氏の数多あるなかにおいて編集を担当している。このことが示す通り、彼の執筆の速さと情報処理能力の高さは早くから抜きんでており、誰もが認め、羨むところであった。ましてや手がけた主たる発掘調査のすべてにおいて大部の報告書を揃え、それをベースとして歴史叙述を展開するという研究者の理想形を体現した、見習いたくても見習えない存在であった。南郷遺跡群や伴堂東遺跡などの集落遺跡や工房の分析を通して当時の王権の性格を考えていくというアプローチは、王権を直接示すところの古墳の調査や副葬品の分析からのアプ

ローチとは一線を画していた。

彼はそれを淡々とこなした。そして報告書や論文の著述のみならず、発掘調査も淡々とこなした。その淡々さの裏に並々ならぬ刻苦精励があったことは想像に難くない。過酷な現場もあったはずであるが、決して重荷になっていようには見えなかった。そこに彼のすごさがあるように思う。けれども、もしその刻苦精励が業績と引き換えに彼の命を削ってしまったのであればなんとも恨めしい。

思うに、彼の積み重ねられた業績は、並外れた能力や努力とともに性格によるところもあったのではないだろうか。

坂君はおおらかであった。細事を気にせず前に進んでいくのが常であった。「まあ、ええんちゃうのん？」が彼のかつての口癖であった。それと両極をなして、彼は徹底的な批評家であった。普通、臆して口に出しづらいことも躊躇しなかった。彼のところに回ってきた決裁文書は、役目とはいえ訂正の赤字だらけになって元の文書がわからなくなることもたびたびであった。彼との会話は、最初に「いや、そうではなくて……」と否定から始まった。結局は

同じことを言っていることもしばしばであったが。

二月一日、悲しみの中で一年ぶりに見た彼の表情は穏やかであった。そしていつもの通り淡々としていた。その表情からうかがえたのは、やるべきことは全てやり終えた満足感であったのだろうか。否とよ、決してそうではあるまい。彼自身が最も悔しく、身悶えする思いであったはずだ。まだまだやりたい、まだまだやるべき仕事があるにもかかわらず、それを遂げられなかった自分の生の短さを恨み、呪ったことだろう。新たな著作をも企画していて、今年中に脱稿の予定であったとも仄聞する。

かつて末永雅雄先生は、将来の大成を期待された愛弟子藤井祐介氏の早世を嘆き悲しまれ、その追悼文の



写真4 令和4年3月 離任式  
(前列左から5人目が坂 靖氏、3人目が筆者)

結びにおいて、彼の世での氏の学問の継続を願われた。立場や状況は異なるが、思いは全く同じである。末永先生の言葉をそのまま坂君に向けた。

坂君、再生して現世の中断を続けて下さい。

# ソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘と イタリア見学行（下）

北山峰生

## 五. 調査をめぐる人々

発掘調査は、夏季の三ヶ月を当て  
るのが通例で、七月から一〇月初旬  
までで実施されている。調査に当た  
るのは松山聡さん、岩城克洋さん、  
杉山浩平さんのお三方で、重機掘削  
の間は一人で現場を回し、八月から  
は本格的な調査にはいるため三人体  
制となるのが通例だということであっ  
た。

調査団ではソンマ・ヴェスヴィアー  
ナ市内にある民家の一部を借り上げ、  
そこを宿舎かつ調査拠点としている。  
私たちも、基本的に宿舎でお世話に  
なった。宿舎の一部は収蔵庫を兼ね  
ており、二〇年におよぶ出土品の数々  
が所狭しと収められていた。

現場では作業員のほか、考古学専  
攻のイタリア人学生も一緒に作業に  
当たっていた。時折、彼らの師であ  
るアントニオ・デ・シモーネ氏（ス  
オル・オルソラ・ベニンカーザ大学  
教授）や、若い頃から調査団と寝食  
を共にしているクラウディア・アン  
ジェレッリ氏（パドヴァ大学）が現

場を訪れ、学生に指示を与える姿を  
見かけた。

調査の終盤では、毎年、説明会が  
実施される。その説明会は、開始当  
初こそ調査団が説明を行ったものの、  
その後は地元ボランティアに運営  
が委ねられているとのことである。

## 六. イタリアの遺跡

私はエトルリアの遺跡、ギリシア  
神殿、ローマ時代の煉瓦構築物など  
に関心を持っていたので、限られた  
時間の中でそれらを訪れたいと考え  
た。もつとも、特別に何かを調査す  
るといような目的意識があったわ  
けではなく、気楽に訪れること自体  
を楽しんだ。

エトルリアは、ローマ台頭以前に  
地中海世界において勢力を誇ったこ  
とが知られている。紀元前のヨーロッ  
パでは、アルプス以北の諸文化と地  
中海世界とで盛んに文化交流が興っ  
たとされる。その時、交流の核となっ  
たのがギリシアとエトルリアで、そ  
れらとの相互関係の中で、ハルシユ

タット文化、ラ・テーヌ文化といっ  
たヨーロッパの初期鉄器文化が発達  
したという。

今回は、タルクイニアとチエルヴェ  
テリを訪れた。いずれも墳墓群が世  
界遺産に登録されていて、日本の群



図2 関係地名分布図

集墳のように一定範囲に墳墓が密集  
して作られている。特にチエルヴェ  
テリに所在するバンディタツチャの  
墳墓群は整然と配置されており、階  
層構成が手に取るように視覚化され  
ているのが印象的であった。墓域の



写真4 チエルヴェテリの墳墓群



写真3 タルクイニアの装飾墳



写真5 パエストウムの神殿

奥部に明らかに大形の墳丘をもつ円墳や、方形区画の中に多数の墓室を並べた集団墓地が所在し、その前面は墓道状の谷になっていて、谷の両側に小形円墳、あるいは横穴墓状の墓室が配置されるという具合である。現地のガイダンス施設で見かけたパネルによれば、紀元前七〜三世紀の、およそ五百年にわたって営まれた墳墓群であるらしい。個々の築造時期を確認する必要はあるが、いったいどのような原則で造墓した結果、あのように整然とした配置ができたのだろうかと思議に感ぜられた。

ところで、ギリシアが地中海世界の各地に殖民都市を築いたことはよく知られている。イタリア半島周辺では、エルバ島で産する鉄鉱石を求

めてギリシア人が進出してきたものの、北イタリアはエトルリアの勢力圏で近づけず、それ故に周縁部つまり南イタリアに都市を築いたと説明される。シチリア島のアグリジェント、ナポリ近郊のパエストウムなどが、その一例である。

これらの地には、ギリシア神殿の古い様式（ドリス式）のものがよく残っている。遺存具合の程度はさまざまだが、アグリジェントでは五棟、パエストウムでは三棟の神殿を見ることができた。これらの石造神殿は、もとは木造であったものを石に転換したゆえに、石造建築としては不利な梁を支えるため柱を多用したと言われている。最近では、それほど単純に素材を置き換えたというものではないとの言説も見かけるが、いずれにせよ列柱により建物の荘厳さを演出する西洋建築の起点がここにあるのだろう。

また、煉瓦構築物は、ソンマ・ヴェスヴィアーナの調査現場はもちろん、ポンペイやエルコラーノでも多く目にする機会があった。石造に始まり、おそらくその代替として開始されたであろう煉瓦造、一方で別のアイデアに起源をもつコンクリート造。それらが組み合わさって、ローマのひ

いては西洋の建築が発達していったのである。今回はその一端を垣間見たに過ぎないが、これからも関心をもって資料を見たいものである。

#### 七. おわりに

こうして、瞬く間に三週間が過ぎ去った。発掘ではすばらしい遺跡に巡り会え、また関心の向くままに方々の遺跡を訪ね歩くこともできた。すべてが新鮮な経験であり、そして日常の自分自身の調査や研究を振り返る貴重な機会となった。今、新たな意欲と共に今後の取り組みを続けていきたいと思っている。

#### 参考文献

東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門  
二〇二一『イタリア ヴェスヴィオ山の噴火罹災遺跡の学術調査二〇二一—二〇二〇年』

## ひとの動き

(退職) 令和五年三月三十一日付)

宮原晋一 調査部調査課調査第二係

技師補(再任用)

## 附属博物館展示案内

◎二〇二二年度 発掘調査速報展

### 「大和を掘る38」

会期…令和五年七月一日(土)

〃九月三日(日)

附属博物館では、県内市町村、奈良文化財研究所、元興寺文化財研究所、寺社などのご協力を得て、発掘調査で出土した資料を速報展『大和を掘る』にていち早く公開展示し、その成果を知って頂く機会を設けてきました。

三八回目となる今回は、奈良県で昨年度に発掘調査された遺跡を中心に三一遺跡を選び、出土遺物・調査写真パネルを展示します。最新の発掘調査の成果を通じ、文化財の魅力を感じていただきたいと思います。



平城京左京八条一坊九坪 (南から)  
(当研究所調査)